研究雑話（77）
人間発達の物質的基礎（四一）：結び（一）、活動を媒介とした意志の自由と客観的必然の制限。

藤井力夫

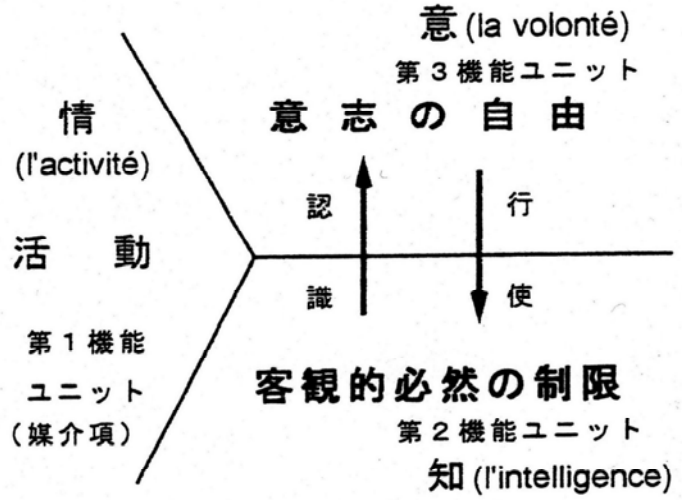
前回は、この間、対象としてきたある自閉症児における発達課題の設定をめぐってお話しました。ことば、かず、描画・造形、からだ、うた、といった学校での活動内容でした。外からのカテゴリーで引っ張ると、根っこが抜けたようになってしまいます。彼自身の活動として思い切り展開されなければなりません。彼自身の興味・関心から出発し、彼自身の信号（ことば・韻律）で、脳の前方部と後方部が結びつきを強めていく。これが望まれます。脳神経系というブラック・ボックスが生き続けるためには、刺激を読みとり、出力することです。能動的に読みとり、出力する。これが生命です。以下、人間発達の物質的基礎を結ぶにあたって、今回は、脳神経系における統一体としての存在に立ち戻ってお話したいと思います。

本稿のはじめで（雑話四〇）、人間発達の物質的基礎を説明するものとして、A．R．ルリアの「脳の基本機能ユニット」を紹介しました。即ち、覚醒水準や姿勢トーヌスの調節機構を中心とする第一機能ユニットが媒介役になって、感覚の受容・加工・貯蔵の第二機能ユニットと、行為のプランニング・再認調節の第三機能ユニットが相互作用するという考え方です。これは、《構造と機能》からの提起で、現代の脳研究の到達段階からみてもいっそう真実です（雑話四四、六六等）。

また、障害児教育の創始者、E．セガンは、活動を媒介とした知性と意志との相互作用に、人間発達の必然性を求めました。ルリアの提起は、その現代的解答とみなすことができます（雑話三）。「知・情・意」の三位一体のなかで、「情」を「活動」と読み替えたところに、セガンの教育方法を優れたものにしたのでした。

図では、「意志の自由」と「客観的必然の制限」の対立として整理しました。自らの願いや問題を試す諸活動を通じて、両者は統一へと相互作用します。媒介項としてのこの活動こそが、脳神経系のまとめ役です。カレーライスを食べたい。自分で作ってみたい。仕事を上手にしたい。バスケットボールをやりたい。連休に実家に帰りたい。グループホームで生活してみたい、等々。これらに挑戦してみてはじめて、「自由」を得ることができます。「自分流に生きる」といいます。それは、興味や関心をその人なりに試してみるということです。試し、確かめるなかで必要な諸条件を学び、自分のものとします。仮設的に試みないと、脳は何も学ばないとしたら、いっそう重要です。遅々とした歩みだからこそ、各人の関心や興味、疑問や期待、これらを大事にしたい。努力を惜しまないようであれば、「自由」に一歩、近づいたことになります。

（北海道教育大学教授）



活動を媒介とした意志の自由と客観的必然の制限

人間はどのような意志を持とうと自由である。しかし客観的必然を支配しない限り自由を得ることはできない。たとえば、トマトを栽培して生計を成り立たせたければ、それが育つための諸条件を知っているだけでなく、実際に行使しなければならない。この行使を媒介として客観的必然の制限を支配し、意志の自由を実現できるのである。

この関係は、脳神経系にも当てはまる。A.R.ルリアの「脳の基本機能ユニット」では、第１機能ユニットを媒介とした第２機能ユニット、第３機能ユニットの相互作用に対応する（雑話 40）。

障害児教育の創始者、E.セガンにおける人間の統一性に関する「三位一体（知・情・意）」論も、これに対応すると考えられる。彼は、「情」を「活動(l'activité)」に置き換え、これを媒介とした「意志(la volonté)」と「知性(l'intelligence)」の相互作用に、人間発達の必然性を理解したのであった（雑話３）。